

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 翻譯授業についての一試案—加訳と減訳の早期導入を目指す練習法

A Case Study in Translation Teaching: "kayaku" and "genyaku" Exercises in Initial Curriculum

doi:10.29714/TKJJ.201012.0012

淡江日本論叢, (22), 2010

作者/Author: 林寄雯(Chi-Wen Lin)

頁數/Page: 241-256

出版日期/Publication Date: 2010/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201012.0012>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼 (Digital Object Identifier, DOI) 的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



翻譯教學上的練習實例

—於課程初期導入加譯與減譯的練習法—

林寄雯

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

本篇論文的目的是在探討以對話、電影名稱、節目名稱、人名等作為翻譯文本的教授法。有別於文章的翻譯，對話等文本的翻譯要求更深的理解能力以及更富有創作性的譯文。

從事翻譯教育的人經常會思考一個問題，要使用何種方式讓學習者了解翻譯的理論，同時能達到實踐的目的。翻譯課的授課內容以文章的翻譯為主，進行包括理解文章、翻出譯文、譯文的修辭、翻譯的比較以及誤譯分析等相關的練習活動。

翻譯的初學者往往要逐字逐句翻譯，才認為已經把文章翻譯完成。本篇論文將提供練習的實例，探討如何在翻譯課程的初期，透過對話等文本的翻譯練習，提升加譯與減譯這兩項基礎翻譯技巧的能力。

關鍵詞：翻譯教育、加譯、減譯、對話、創作性

A Case Study in Translation Teaching: “kayaku” and “genyaku” Exercises in Initial Curriculum

Lin Chi-wen

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper aims at exploring a possible teaching method in translation, based on using conversation, movie titles, TV program titles, and people’s names as sources. As oppose to articles, these sources demand more comprehensive and creative abilities to translate.

A translation teacher often considers the challenge of how to make learners understand the translation theory and practice it at the same time. Articles-translation-based curriculum consists of translation exercises including comprehension, interpretation, rhetoric, comparison, and misinterpretation analysis.

A beginner tends to translate the text “word-for-word” to complete the target language. This paper therefore explores a translation method in an initial curriculum practicing through translating the sources such as conversations, to elevate the two basic translation skills, kayaku(加訳) and genyaku(減訳).

Keywords : translation education, kayaku(加訳), genyaku (減訳) ,
conversations, creativity

翻訳授業についての一試案
—加訳と減訳の早期導入を目指す練習法—
林寄雯
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

本論文では会話文、映画名、番組名、人名といった文章とは異なるテキストを取り上げ、文章の翻訳より、テキストに対する理解を強く求め、創作性の高い訳出文を求める練習の教授法を提案する。

翻訳の理論をどのような方法で学習者に理解してもらい、そして実践に結びつけていくかは翻訳教育に携わっている教師としての課題である。授業中、文章の翻訳練習に重点を置き、文の理解、訳出、訳文のレトリック、誤訳の分析と訳作の比較といった一連の練習作業を行う。

初心者は往々にして一々対訳しないと、翻訳した自信が持てない。会話文などといったテキストの翻訳練習を通して、翻訳技法の基礎である加訳と減訳の実践を早期に導入することを目指す。

キーワード：翻訳教育、加訳、減訳、会話文、創作性

翻訳授業についての一試案
—加訳と減訳の早期導入を目指す練習法—
林寄雯
淡江大学日本語文学科助理教授

1 はじめに

翻訳の一般的技法には加訳、減訳、反訳、変訳、倒訳、分訳、合訳といった技法が挙げられる¹。その中でも加訳と減訳はもともと基本的な技法とされている。翻訳の分野だけではなく、通訳の分野でも、加訳と減訳は最初の段階で習得しなければならない技法である。

翻訳の理論をどのような方法で学習者に理解してもらい、そして実践に結びつけていくかは翻訳教育に携わっている教師としての課題である。授業中、文章の翻訳練習に重点を置き、文の理解、訳出、訳文のレトリック、誤訳の分析と訳作の比較といった一連の練習作業を行うが、初心者は往々にして一々対訳しなければ、翻訳に自信が持てない。また、一つの技法にこだわりすぎて、なかなか訳文が決められない場合がある。熟練の翻訳者の文章を読めば、訳文がどの技法を使ったかということよりも、自然な訳文ゆえに読者に伝え得るのだということがわかる。

実際の翻訳では一つの技法だけでなく、いくつかの技法が同時に使われて翻訳されることがかなり多い²。一々対訳しないと、翻訳した自信が持てないことに対しては、加訳と減訳の導入が必要である。また、一つの技法にこだわりすぎないためには、童謡、標題、書名、人名、映画名、固有名詞といった訳の練習が必要である。これらの練習を通して、翻訳の一番中心的なコツをつかむことができる。本論は授業中の実践例を取り上げ、実践の応用方法を提案するもので

¹ 遠藤紹徳、武吉二郎編著 1993 『新編東方中国語講座翻訳篇』 東方書店 P11

² 同注1 P13

ある。

2 加訳と減訳の練習法

『新編東方中国語講座翻訳篇』の第二章では、加訳と減訳の定義を次のように挙げている³。

加訳：

翻訳の際、原文にないことばをつけ加えて訳すことである。たとえば、「昨天我發燒、一直在家休息」という中国語を日本語に訳す場合、「きのう私は熱があった。ずっと家で休んでいた」としたのでは、いかにもぎこちない訳文になるので、中国語には因果関係が含まれて居ることを読み取って、因果関係を表す「ので」をつけ加えて「きのう私は熱があったので、ずっと家で休んでいた」と訳す。これが加訳である。

減訳：

加訳とは反対で、原文にある一部のことばを訳さないことである。「不訳」とも言われる。(中略)たとえば「對面有一所學校」を日本語に訳す場合、一字一句漏らさずに「向い側に一つの学校がある」と訳すよりは、「一所」を訳さないで「向い側に学校がある」とした方が日本語としてすっきりする。これが減訳である。

以上のような加訳と減訳の技法を応用することによって、自然な訳文となる。担当しているクラスでは会話文の翻訳を通して、加訳の練習を行う。その例を次に取り上げる。

練習例 1：

そこには田辺雄一が立っていた。
「先日はどうも。」

³ 同注 1 P11

airiti

と私は言った。葬式の手伝いをたくさんしてくれた、ひとつ年下のよい青年だった。聞けば同じ大学の学生だという。今は私は大学を休んでいた。

「いいえ。」彼は言った。「住む所、決まりましたか？」

「まだ全然。」

私は笑った。

「やっぱり。」

「上がってお茶でもどうですか？」

「いえ。今、出かける途中で急ぎですから。」彼は笑った。「伝えるだけちょっと、と思って。母親と相談したんだけど、しばらくうちに来ませんか。」

(吉本バナナ『キッチン』P10)

(二重アンダーラインは減訳を示す)

門口站著田邊雄一。

「啊，那天謝謝你的幫忙。」我說。

祖母的葬禮上他出了不少力，是個比我小一歲的優秀青年。問他才知道我們讀同一所大學；不過現在我暫時休學。

「沒什麼。」他說：「住的地方已經看好了嗎？」

「哪有啊？」我笑著說。

「不出所料。」

「進來喝杯茶吧？」

「不客氣了，我有急事要辦，正好路過，」他也笑著說：「順便來傳個話。我和我媽商量了一下，想問你要不要暫時來我家住一陣子？」

(吳繼文譯『廚房』P10) (波線は加訳を示す)

会話文で練習をする利点は、場面があることである。原文の場面に対し、中国語でどこまで表現しなければ場面がわからないかが説明しやすいので、簡単に理解してもらえる練習である。授業中では、原文をわたして、二人一組で自分の訳を話し合ってから、前に出て自分の訳を発表してもらおう。何組かの発表が終わったら、場面に必

airiti

要な加訳と減訳の技法を応用した訳文を得ることができる。『キッチン』から取り上げられた練習例1の会話文では、加訳することによって、自然な訳文になることを学習することができる。

『日文翻譯進階技法⁴』に、加訳のパターンを四種類取り上げている。第一、「補充人稱代名詞」、即ち人稱代名詞を補う。第二、「増加數量詞」、即ち數量詞を加える。第三、「加副詞」、即ち副詞を加える。第四、「加譯原文的內涵意義」、即ち原文に含まれている意味合いを補う。

『キッチン』の用例の中での「先日はどうも」を「那天謝謝」と訳すより、「啊，那天謝謝你的幫忙。」の「啊」と「你的幫忙」を付け加えたほうが自然な訳文になる。上述の「第四、原文に含まれている意味合いを補う」技法にあたる。また、「聞けば同じ大学の学生だという。今は私は大学を休んでいた。」の訳に「不過」を付け加えた。原文の二つのセンテンスを中国語訳の一センテンスにしたための接続詞の加訳である。「母親と相談したんだけど、しばらくうちに来ませんか。」の訳に「我」「一下」「想问你」を付け加えた。「我」と「想问你」は上述の「第一、人稱代名詞を補う」技法で、「一下」は上述の「第三、副詞を加える」技法にあたる。

会話文を翻訳する際に、加訳を使う技法は日本語の場合だけでなく、英語の場合も同じような技法が使われる。『語言與翻譯⁵』に収められた「為靈魂開另一道門」という文章で、著者黃國彬が会話文の翻訳の重要性を唱えた。とくに小説の中の会話文の翻訳の良さによって、小説全体の翻訳の質が上がる。また、会話文の特色について次の二点が取り上げられた。

第一，在句法上，對話通常比非對話簡短。(中略)

第二，「對話」一詞有一個「對」字，表示文氣相連，說話者

⁴ 龐春蘭編著 1999 『日文翻譯進階技法』 三思堂 P 69～73

⁵ 黃國彬著 2001 『語言與翻譯』 九歌出版社 P 188～189

airiti

會彼此呼應。下面的例子，就表現了這一特色：

（第一、會話文における語句の使い方は、地の文より短くなるのが一般的である。（中略）

第二、「対話」という語に「対」があるということは、話し方を一にした、話者が互いに呼吸を合わせることを示唆している。次がその一例である：）（筆者訳。以下同。）

Megan went into the house and my mother and Hal joined the group at the grill. I lingered awkwardly, waiting for Megan. She returned with two tall-neck beers and nodded at our parents.

“Well, what do you think?” She asked.

“About what?”

“About them” (“The Oracle”, P.316)

翻譯引文中的三句話時，如果不能掌握文氣，或掌握文氣後不能善加表達，譯文就會牛頭不對馬嘴：

（ここの3つの會話文の翻訳において、その話し方を把握できていない場合、または把握したとしてもうまく表現できていない場合、訳文に阿吽の呼吸が見られないことになる：）

「嘿，覺得怎麼樣？」美菘問道。

「關於甚麼？」

「關於他們。」

（「ねえ、どう思う？」と美菘が聞いた。

「なんのこと？」

「彼らのこと。」）

細查文氣後小心逐譯，句子才會彼此呼應：

（話し方に細心の注意を払った訳文は、語句の間に呼応がみら

airiti

れる:)

「嘿，覺得怎麼樣？」美菘問道。

「覺得甚麼『怎麼樣』？」

「覺得他們『怎麼樣』？」

(「ねえ、どう思う？」と美菘が聞いた。

『『どう思う』って、なにを？』

『彼らのことを『どう思う』？』)

上述の翻訳方法に加訳という用語が使われていないが、加訳と同じような機能が働ける技法は使われている。授業中、訳した会話を二人一組に練習させることは上述の「文氣相連，說話者會彼此呼應（話し方を一にした、話者が互いに呼吸を合わせる）」というポイントにつながる。

また、『キッチン』の用例にある「いえ。今、出かける途中で急ぎですから。」の「から」の減訳についての説明であるが、『日文翻譯進階技法⁶』では、減訳のパターンが三種類取り上げられている。第一、形式体言と形式用言である。例えば、ところ、こと、もの、の、方、わけ、という等。第二、慣用的な連語である。例えば、にとつて、による、において、における、のため、のように、として等。第三、終助詞である。例えば、な、がね、ねえ、さ、の、わ等。

上述した三種類の減訳のパターンに「から」は挙げられていないが、「から」の減訳を説明するのに、白川博之の論文「従属節による「言いさし文」の文法的位置づけ⁷」にヒントを得ている。同論文では「「言いさし文」は、談話レベルにおいては、文内に談話的要素（終助詞、接続詞、ノダなど）を持つ「独立文」と同等に位置づけることができる。」と述べている。「から」に関する次のような用例があ

⁶ 同注4。 P 76～80

⁷ 白川博之 2007 「従属節による「言いさし文」の文法的位置づけ」『台湾日本語言文学研究学会第七回定例学会』 P 6

airiti

る。

良雄「(ひとりで食事をはじめたところ)」

愛子「(台所で野菜をいためている)」

良雄「ああ、今度の日曜、一日ぼくいないからね」

愛子「(ガスを止める)」

良雄「ワングルで高尾山行くから」

愛子「(反応せず、フライパンと皿を持って来る)」

(山田太一『ふぞろいの林檎たち』P44)

なお、同論文の結論には「すなわち、文レベルでは区別される独立文と従属節が、談話レベルで捉え直してみれば、独立文は従属節に似た面を見せ、逆に、従属節は独立文と似通ってくるというわけである。」と述べられている。練習例1の『キッチン』の用例にもどってみると、訳者はこうした理論を知った上で「から」を減訳したとは思えない。自然な訳文こそが訳者のよりどころだと思う。裏を返せば、加訳と減訳のフルな応用は自然な訳文にある特徴だといえよう。

3 訳名の発表を通しての練習法

加訳と減訳の練習は初心者の一々対訳する問題点を解決するよい方法である。加訳と減訳を導入してからの次のステップにおいて、初心者にとっての問題点は技法の応用が多少できても、技法にこだわりすぎるくらいがある点である。このような欠点を改善するために、標題、書名、映画名、番組名、人名、固有名詞などの翻訳を導入することにする。台湾では多くの、よく知られている動画の訳名、映画の訳名、番組の訳名があり、次のようなものが挙げられる。

「となりのトトロ → 龍猫」、「千と千尋の神隠し → 神隠少女」、「ワンピース → 海賊王、航海王」、「平成イヌ物語バウ →

airiti

家有濺狗」、「ポケットモンスター → 神奇寶貝、口袋怪獸、寵物小精靈」、「花より団子 → 流星花園」、「着信アリ → 鬼來電」、「ドラゴンボール → 七龍珠」、「どっちの料理ショー → 料理東西軍」、「あいのり → 戀愛巴士」。

「となりのトトロ → 龍貓」は「となりの」を訳さない減訳の例で、「着信アリ → 鬼來電」は「鬼」をつけ加える加訳の例である。「ドラゴンボール → 七龍珠」は数字の「七」をつけ加える加訳である。また、「ワンピース → 海賊王、航海王」の訳例は原文の one piece とまったく違う発想のもとでの訳名である。「千と千尋の神隠し → 神隱少女」の訳では「神隱し」をそのまま新語として使い、「千と千尋」は中国語の「少女」と訳された。「どっちの料理ショー → 料理東西軍」の例では、「どっち」を「東西」に書き換えた面白い発想である。また、「平成イヌ物語バウ → 家有濺狗」と「花より団子 → 流星花園」と「あいのり → 戀愛巴士」では、字面の意味を訳さないで、番組の内容から新しく訳名をつけた例である。

授業では、これらの訳名がどのような考慮を経たうえで、最終の訳と決められたかについて発表してもらおう。集めてきた資料によるものでもいいし、自分の解釈でもよいから、学生の一つの訳名に対する解釈を発表してもらおう。そして、翻訳は正解のない仕事だと理解してもらおう。発表を通して、前に述べた「一つの技法だけでなく、いくつかの技法が同時に使われて翻訳することがかなり多い」という訳文に対する柔軟な態度を養成することができる。

次に学生が発表した例を取り上げる。

発表例 1 着信アリ → 鬼來電

「着信」是指來電的意思，「アリ」表示有。中文確實地將「着信アリ」翻出來了。而且在「來電」前多加了一個「鬼」字。這更能讓觀眾了解此部電影的內容。因為這通來電，不是那麼單純的，而是鬼

airiti

打來的。

（「着信」は中国語で「來電」にあたり、「アリ」は有ったことを指すので、「着信アリ」はしっかりと中国語に訳出されている。さらに「來電」の前に幽霊を意味する中国語の「鬼」を付けくわえた。こうすることで、観客にはこの映画の着信がわけありの着信で、あの世からのものだということがも伝えることができる。）

發表例 2 どちらの料理ショー → 料理東西軍

這個中文名我想大家都不陌生，是個很成功的譯名。直譯的話怪怪的，變成哪一邊的料理秀。所以料理東西軍這個名字很符合節目內容又簡潔有力。東西軍有對抗和比賽的涵意，是一種很貼切的譯法。

（「料理東西軍」という中国語訳は、たいへんな成功をおさめた訳で、みなさんにもすっきりお馴染みかと思われる。「どちらの料理ショー」をそのまま直訳した場合の「哪一邊的料理秀」という中国語訳は、なんだか変である。「料理東西軍」なら、番組の内容にぴったりであるし、簡潔で、よくアピールもできている。「東西軍」には対抗と競争の意味合いがあり、当を得た訳仕方である。）

發表例 3：あらしのよるに 翡翠森林—狼與羊

這是一部日本的電影，內容是敘述一隻野狼「嘎布」和一隻小羊「咩」在一個暴風雨的夜晚，因為下大雨的關係，一起在一間破屋子裡面躲雨。因為天色昏暗，所以彼此都不曉得對方是狼和羊，也因此他們聊得很投緣，相約隔天要一起吃午餐。由於他們是在暴風雨的夜晚中相識的緣故，所以約定見面時的暗號就是「あらしのよるに」。

中文將它譯成「翡翠森林—狼與羊」。大概是因為故事中野狼和羊是主角，他們約定要去尋找那一片翡翠森林，所以才取這個名字。一般來說，如果將這部電影直接譯成「在暴風雨的夜晚」的話，聽起來還蠻像恐怖片。

（これは日本の映画で、オオカミの「ガブ」とヤギの「メイ」の物語である。ある嵐の夜、ガブとメイは雨宿りのため、とあるおんぼ

airiti

ろ小屋に避難してきた。すでに日も暮れていて、暗闇の中で互いにその正体を知らないまま語り合い、意気投合する。そして、次の日に一緒に昼ご飯を共にすることを約束した。嵐の夜に知り合ったため、「あらしのよるに」を再会した時の合い言葉とした。

この映画名の中国語訳が「翡翠森林－狼與羊」なのは、おそらく物語の主人公がオオカミとヤギで、「緑の森」を探す約束をしたためである。仮に「あらしのよるに」をそのまま中国語に直訳したら、なんだかホラー映画みたいになってしまう。）

担当していたクラスの学生の発表例をみると、加訳と減訳を応用した訳名より、内容にもとづいて新しく訳名をつくりあげた例が多いほうである。映画名、番組名の付け方に文化的要素及び言語習慣に影響されているとみられる。

4 訳名の創作

よく知られている訳名についての発表をした後で、自分で訳してみたい気もちがわいてくることがある。また、他人の訳名を解釈しているうちに、自分なりの訳を創り出すこともある。

バンド名「オレンジレンジ」の中国語訳は「橘子新樂園」である。どうしてこの訳名であるかについて、学生達の解釈はそれぞれであるが、自分が訳したとしたら、どのような訳になるかを考えてもらおう。担当していた三年生のクラスに宿題を出したところ、次のような訳名が学生達によって創作された。

橙果幻想曲、橘子戀團、橘枳、橘子大集合、橘色音域、ORANGE RANGE、沖繩橘子少年、橘子桔、橘子汽水、橘子皮、OGG、橘子橙（2名）、橘子勢力、橘子漫遊、橘子新勢力（2名）、橘子X橘子、橘子五人組、橘子樂園、橘子漫遊樂、橘子甜甜圈、橘子特區（3名）、橘子光波、泛橘勢力、橙色間距、橘子 RANGE、大橘子、柳丁橘子、野

airiti

橘牧場、橘子領域、橘子園、橘子牧場、橘色樂園、橘子天堂、柑橘五人組。

学生の訳名をみると、同じ訳名を創った例が少ないことがわかる。また、原文にある発音上のリズム感を中国語で表現する際に、困難があったこともわかる。学生の訳名創作理由を次に取り上げる。発表する際には、この学生の訳がいい、あの学生の訳がよくないというような教師自身の判断を入れないで、学生の発想を最大限に尊重しなければならない。訳名の正解を見つける発表会、あるいはもとの訳名よりすばらしい訳名を見つける発表会ではないことを、教師がちゃんと把握しなければならない。

創作例1：大家把「ORANGE RANGE」翻譯成「橘子新樂園」。其實如果直譯的話，得到的答案可能是「橘子領域」。如果是我的話，我想把它翻譯成「沖繩橘子少年」。理由是所有的團員都很年輕，而且他們的歌都很活潑很青春，加上他們都來自沖繩，所以我決定這個名稱。

(創作例1：みんな「ORANGE RANGE」を「橘子新樂園」という中国語に訳すが、直訳した場合、おそらく「橘子領域」になるのではないかと思う。私だったら「沖繩橘子少年」と訳したい。その理由は、グループメンバーがみんな若くて、歌う曲に元気と青春らしさがあるからだ。それに加えて、彼らはみな沖縄の出身であることから、私はこのような訳名にした。)

創作例2：若硬要翻成中文，我認為有必要保留「橘色」二字，此外レンジ(RANGE)在英文中若以名詞解釋，則有「音域」之意，我認為「橘色音域」正好與音樂作連結。不過，我認為最適當的還是將其團名「オレンジレンジ」直接以英文「ORANGE RANGE」呈現出來，因為英文為現今世界的共通語言。再者、過去常發生日本藝人來台宣傳時，發現其團名或藝名經過台灣翻譯後，與原意相當不符而鬧笑話。「オレンジレンジ」在日本發行過的專輯，每張封面團名皆為英文的

「ORANGE RANGE」。因此，我認為沒有必要特地譯成中文，英文團名更不失其本意。

（創作例2：どうしても中国語にしなければならないのなら、私は中国語でオレンジという意味の「橘色」の二文字は譲れないと思う。また、レンジ（RANGE）を英語の名詞として解釈した場合、「音域」という意味があるので、「橘色音域」とすればちょうど人々に音楽を連想させることができる。でも、やはりグループ名の「オレンジレンジ」を直接英語で「ORANGE RANGE」としたほうが最も適当だと思う。なぜなら、英語はすでに世界の共通言語であるし、また日本の芸能人が台湾に宣伝で来た時、そのグループ名や芸名が台湾で訳されたものと全然違って、しばしば笑い話になったこともあるからだ。それから、「オレンジレンジ」が日本で発売したアルバムのグループ名がどれも英語の「ORANGE RANGE」だ。だから、わざわざ中国語に訳す必要はないし、英語のほうがより本来の意味を損なわないでいいと思う。）

5 おわりに

本論文では翻訳するときの柔軟な態度を養成し、もっと自然な訳文をつくることに役立つ練習法を提案した。初心者は一々対訳しないと、翻訳した自信が持てない。これらの練習法の早期導入によって、一々対訳するような訳文から解放され、習得した技法のフルな応用を目指すことができる。また、翻訳の最終目標といわれる「等価効果」の理解にも役立つものである。加訳と減訳の早期導入に役立つような指導の実際例をより多くまとめることを今後の課題とさせていただきます。

（本論文は2007年12月15日に開催された「2007年度日本語文・日語教育国際学術研究会」での口頭発表を加筆・修正し

airiti

たものである。ここで断っておきたい。)

参考文献

(日本語文献)

- 1 遠藤紹徳、武吉二郎編著（1993）『新編東方中国語講座翻訳篇』初版3刷 東方書店
- 2 王浩智著（2005）『中国語翻訳作法一文の理解から訳出のプロセスまで』 東京図書
- 3 時枝誠記著（1983）『日本文法』口語篇（改版第7刷）岩波書店
- 4 白川博之（2007）「従属節による「言いさし文」の文法的位置づけ」 『台湾日本語言文芸研究学会第七回定例学会』
- 5 吉本バナナ（2002）『キッチン』十版（1998初版） 角川書店

(中国語文献)

- 6 吳繼文譯（1999）『廚房』 時報文化出版
- 7 黃國彬著（2001）『語言與翻譯』 九歌出版社
- 8 龐春蘭編著（1999）『日文翻譯進階技法』 三思堂
- 9 Peter Newmark 著 賴慈芸編譯（2005）『翻譯教程——翻譯的原則與方法』 台灣培生教育出版